

滞 歐 雜 記 帳 (その十七)

工 學 士 山 本 峰 雄

12. 南 獨 の 旅 (續)

我々のバスはザルツブルグを後にザルツアツハ河の溪谷に沿ふ補装路を南下した。峨々たる山が次第に深くなつて緑に覆はれた峰々の間に遠く白雪を戴く山が隠見する。谷合の所々にバイエル風の民家が散見する。どの家も緩かな傾斜の屋根の下に白壁を圍らし窓には紅白の花を飾つて居る。やがて道はザルツアツハ河を離れて急坂に入つた。走る事 30 分にしてヒットラー總統の山荘で有名なベルヒテスガーデンの町に入つた。遊覽の人々の車が北に南に往來し、ガソリンスタンドの前には 30 臺許りの車が溢れて居る。何れもガソリンの配給を待つて居るのである。ガソリンはここ二、三日前から一度に 10 立以上賣らなくなつて居るのであるがガソリンスタンドに斯くも多数の車が止まつて、何時來るかも知れないガソリンを待つて居る風景は初めて見るものであつた。チエコ併合の際にも見られなかつたガソリンの統制は獨逸の決心と準備を暗示して餘りあるものがある。こんな時にはバス旅行は有難い。之等の自家用車を尻目に我々は郊外に出て晝食の爲に見晴らしのよいクーアカフェーの下迄乗りつけた。

乗客の大部分は坂を上つてベルヒテスガーデンを一望の裡に收めるクーアカフェーの屋外庭園に入つて食卓についた。白塗りの椅子と唐草模様も鮮やかなテーブルクロスを掛けた食卓は高山のまばゆい陽光を受けて我々を待つて居た。黄と赤

(1) 航空研究所

に染分けたビーチパラソルの下に陽を避けて、遙かに南を眺めるとケーニヒス湖を圍む山は濃紫色の山貌を碧空に浮かし、峰の彼方からは白雲が湧上つて居る。左手は標高 2500 米の高山が聳えて居る。其の頂きに近く白い山小屋が切立つた斷崖の上に危なくかゝつて居る。聞けばヒットラー總統が劇しい政務の餘暇を此處の山荘に休養する時屢々此の山小屋に登つて浴塵を洗ふと云ふ事である。彼は山荘に憩つて建築の書を繙き、小説を楽しみ、而して愛犬と高原に出で、更に信頼する黨の人々と散策し、想をこらしては時に砂上に新しき建設計畫を畫いて論ずるのである。

彼の故郷である舊オーストリーとの國境に廣がるバイエルンアルプスの山々の中に獨り靜かに想を練る彼は一個の聖者にも等しいものであらう。

ベルヒテスガーデンの風光は又此の聖者を迎へるに相應しい清らかな碧空と、緑の高原と、冷峻な高山に圍まれた別天地である。

紫外線の多い高山の大氣の中で楽しい晝食を齎り、クーアカフェーの花園を散策して時を過す。

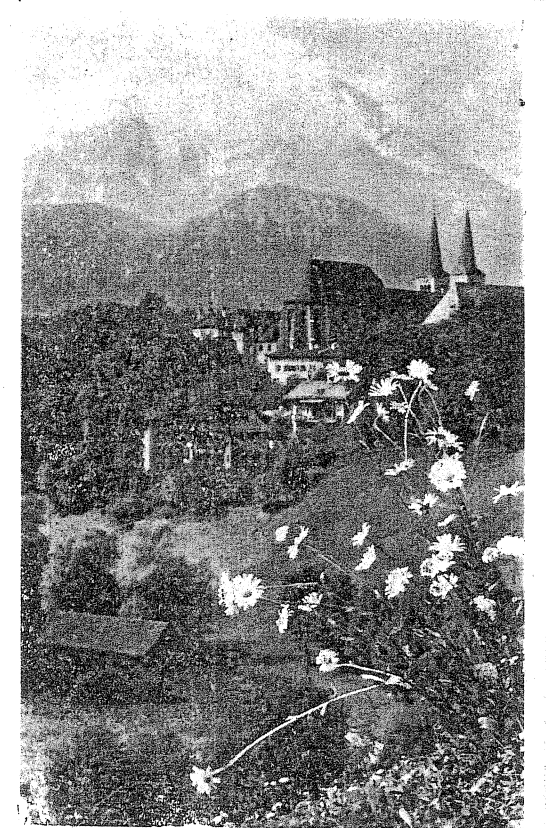
休憩 1 時間の後に再びバスに乗込んで道を前とつて、遂にケーニヒス湖に達する。

廣大な自動車置場にバスを乗棄て、湖畔に着ると、ケーニヒス湖は標高 2700 米の岩山に圍れて飽く迄も濃い碧を湛へて我々を迎へて呉れた。湖水の岸にはバイエル風の雅致豊かなレストランやカフェーが白い砂の上に立並んで居る。どの家も窓にポーチに紅白の花を飾り、花の窓からテラスの食卓を圍む樂しげな人々の顔が見られる。

我々の一行は思ひ思ひに別れて或る人々は湖水の汀を遡つて森の中を散歩道に入り、他の人々は白く塗つた棧橋から遊覽船の客となつた。私も亦遊覽船の切符を求めて上甲板に席を占めた。上甲板にはよく磨かれた舵輪が設けられて年老いた舵取りが此處に席を占めて居る。やがて汽笛を湖面にひびかせて船は靜かに碧波を立て、湖の中に滑つて行く。右手は遙かに岸から急傾斜の高原地帯が緑の裾を廣げて多数のキャンプが白く斜面に點綴し、縦か落葉松か、淺緑の森が屏風の様にキャンプの群をかこんで居る。やがて斜面が盡きると見上げる様な岩山が忽然として青空をさへぎり、水は深く淵となつて冷く光り、遙かな湖の端から船の前面にかけて巨大な山と白雲を映すのであつた。冷たい水にカヌーを操る人々は鏡の如き岩の淵を縫つて去來して居る。岩肌には誰の彫刻であらうか、深淵に呑まれた人を記念する碑文が刻まれて居る。湖心に進むと共に山は兩側より迫つて天日暗く風は冷たく頬をなぞるのであつた。

標高 2714 米のワツツマンの高峰は右舷に雲を戴いて王者の如く聳え、其の麓には白い圓錐狀の聖に赤い丸屋根の尖頭を戴いたザンクト・ハルトマの教會が水に影をうつして居る。

やがて船は直立する岩山に狭まつた水路の中央でエンデンを止めて靜かに波に漂つた。舵取りの老人は無言で真鍮の喇叭を取出して右舷の岩山に向つて高く低く簡単な曲を吹奏した。吹奏が終ると瞬間の間をおいて来た。二度、三度送り、且つ返して暫くは船中にあふれる人々は無言で兩舷の湖の上に渡る音に聞入つたのである。鏡の如く直立する岩山からへつて來る山彦は送つた間と寸分



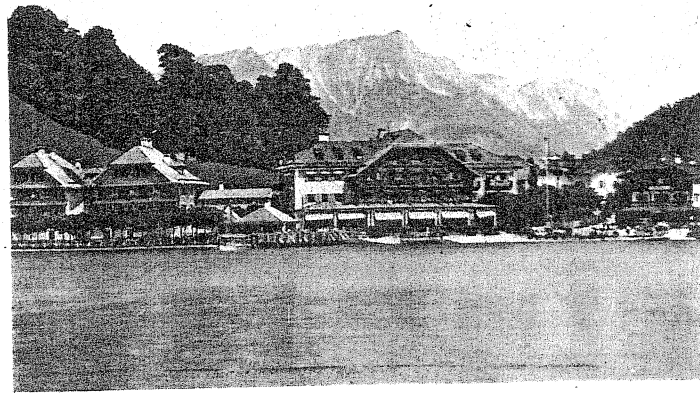
第 1 圖 ベルヒテスガーデン

違はない間を持つて居た。

曲が終るとバイエルン姿の娘もミュンヘンの青年も舵取りの老人を仰いでアンコールの拍手を送



第 2 圖 クーアカフェーより見たるベルヒテスガーデン



第3圖 ケーニヒス湖畔

つた。拍手が終ると尙二曲を吹いて、再びエンヂンがかけられた。人々は宛も音楽會の名曲でも終つた後の様に感激の色を面に浮べて「ヴンダーバー」を連發してぎはめいた。私は獨逸らしいやり方の方に興味を持てた。黙つて喇叭を取出して鮮かな所を見せるやり方はどうも山莊の主だけではなささうである。船は左岸に沿つてハーケンクロイツを風になびかせて進む。岸には山裾を縫つて散歩道が通り、ハイカーが湖面を眺めて林檎をかじつて居るかと思へば、水着姿の一群が汀に寝ころんで居る。



第4圖 ケーニヒス湖ザレタルペの船附場(著者)

湖の突端で大半の客を下ろして船は再び湖を縦斷して出發點に戻つた。

ヒットラー總統の好んで遊ぶケーニヒス湖は、我々の旅情を慰めるに充分であつた。標高602米の碧い水とそして周圍を圍む高山は、たしかに大自然の懐に入つた思ひがするるのである。

岸に上つて散策に時を過ぎ再びバスに乗込んだ時は午後3時を過ぎて居た。

バスはケーニヒス湖から北西に山間の羊腸の舗裝路を上り且つ下つて山の端に傾く入道を左の車窓に受けて走つた。雪を戴く山も漸く視界を遮りかつてやがて上部バイエルンのインツェルに着いて此處で30分間休憩した。

インツェルの町は見事なバイエルン風の商家と農家を連ねて我々の眼を楽しませた。僅かの休憩時間を利用して町をまはつて見る。何れの家も白壁に大きな壁畫が描かれ、優美な鐵製の軒燈が關を飾つて居る。壁畫は家を建てた年の記念すべき事件を描いたものが多い。あるパン屋の壁にはオーストリー併合の時に斧を御ひ家は綱をつけて國境の標識を倒して居る繪が描かれて居る。昨年建てた家である事が判る。

ドアや窓の上部にも壁に美しい模様をかいてある。

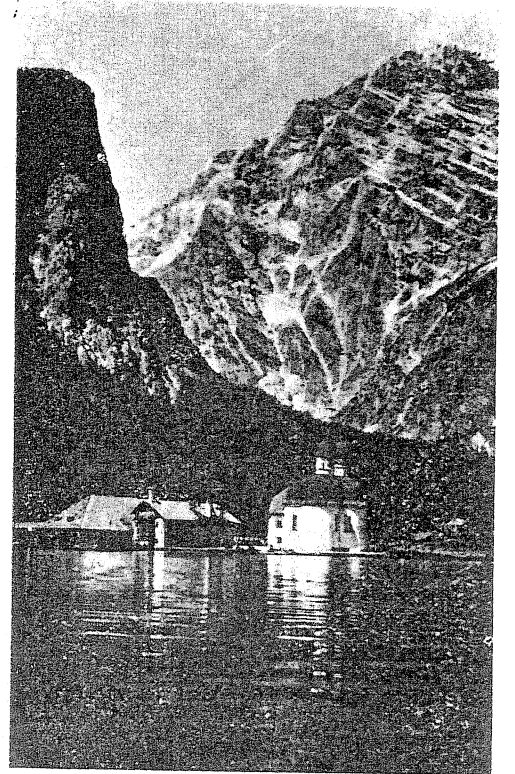
私は一人で町の中を歩いて珍しい家々をフィルムに収めて居るとバイエルンの服装を着けた中年の紳士が近づいて來た。彼は同行する夫人をかへして私と同じ方向に歩いて話しかけて來た。「君は日本人だらう。我

々は友人であるから眞の世界平和の爲にお互に助け合はう。君は獨逸を見て歩いた事であらうが、ナチス獨逸の最近の發達はどう思ふか」等と話つきない。彼は遂に國民自動車の話始めた。彼が最近國民自動車を運轉した經驗に依ると時速40軒でJ字旋回をやつても横滑りは全然ないし、燃料消費量は少ないし、先づ理想的な車である事等を話し、道に立止つてU字旋回の身振りをする。未だ一般に出して居ない國民自動車を運轉したと云ふ以上黨關係の技術者であらうと考へたのであるが、バスの出發時間も近づいて居るので、名前も聞かずに別れなければならなかつた。私も質問して話を聞くだけに終つた。何となく心残りがしたのである。

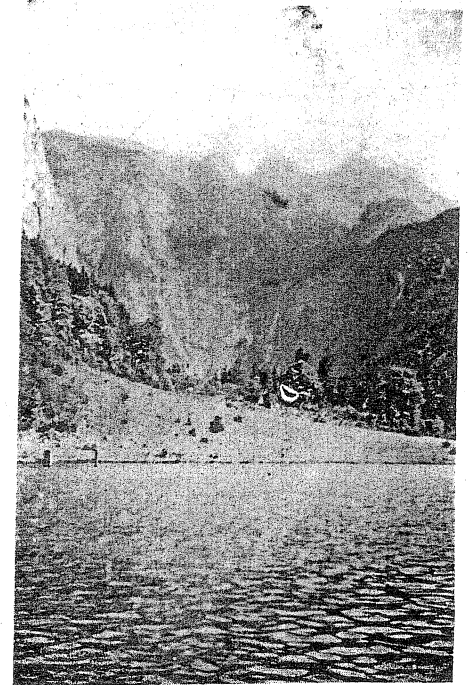
インツェルを發つた我々のバスは一路北上してヒーム湖の手前で國營自動車道路に入り、一路ミュンヘンに向つて風を切つて走つて行つた。ヒーム湖畔のラストハウスは發着の自動車で混雜して居た。南部山嶽地帯の一端に觸れた私は希望を果した楽しい心を抱いてバスの中で満足な眠りをむさぼつた。夕方6時半私は再びホテル・フィーヤヤレスツアイテンに歸つて食堂に入つた。夕食の食卓には脂粉をこらした婦人がシヤンデリヤの下で妍を競つて居た。獨逸には珍しく莓のデザートを誇らしげに運んで來る。やせ細つた小粒の莓は私には御世辭にもほめたくないのであるが、料理の出來を開きに來たボーイ長には型の如く「結構だ」と答へて置かなければ氣の毒な様な氣がして、大いに満足げに振舞つておいた。

翌日は6時に起床して7時半には一人朝食を済ませて、伯林に歸る前の數時間を獨逸博物館の見學に過すべく町に出た。

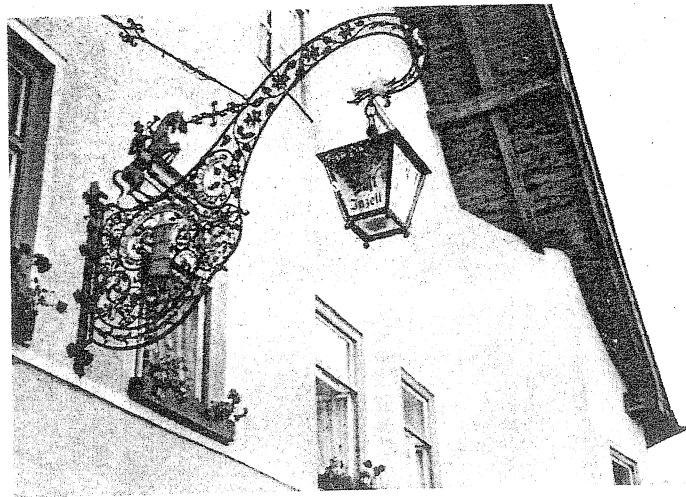
黨運動發祥地のミュンヘンは藝術の都でもある。朝早い美術展覽會の會場を訪れマキシミリアン街をイザール川畔に出で豪壯なマキシミリアネ



第5圖 ザンクト・ハルトロム教會とツツツマン山



第6圖 ケーニヒス湖(著者)



第7圖 インツェルの民家の軒燈（著者）

ウム宮殿の前を川に沿つて獨逸博物館に入る。
オスカ・フォン・ミラーが自然科学と技術との傑作を集めてマキシミアン街に獨逸博物館を建設したのは1903年であつた。1906年には現在のイザール河の島の中に新館を建設する事となり其の定礎式にはカイザー・ウイヘルム二世やバイエルのルートヴィヒ親王が臨席したのであつた。ミラーの計畫は斯くて獨逸朝野の熱心な支援の下に大規模に進められつゝあつたのであるが業半ばにして第一次大戦が勃發して其の計畫は頓挫を來たすに至つたのである。然し彼は之に屈せず



第8圖 ナツサウアー・ケラー（著者）

大戦後の疲弊の最中の1925年遂に新館の開館に成功した。開館式に當つてミラーは「獨逸博物館は單なる國民教育の機關でもなく、また單に科學及技術の名譽を表彰する會館でもない。獨逸博物館は實に獨逸の融合の紀念碑なのである。この博物館は獨逸の一州一國に止らず全國の支援の下に完成したものであるからこそ獨逸博物館と名付けられたのである」と演説して居る。

1928年の圖書館及び大廣間の定礎式にはヒンデンプルグが臨席し、1937年にはヒトラー總統の命に依り獨逸自動車化の進展の爲に自動車館が設けられたのである。

此の博物館に注がれた國の首腦者の熱意は世界に類の無い立派な科學、技術の展示場を作り出したのである。

地理、鑛山、採鑛、採鹽、採炭、冶金、金屬加工、機關、陸上交通、鐵道、陸道及び道路、自動車、橋梁及船舶、航空、氣象、測定、數學、力學、熱學、電氣、光學、テレヴィジョン、音響學、樂器、化學、建築、照明、暖房及冷房、上下水、水浴、ガス及電氣技術、天文、紡績工業、製紙、複刻技術、農業、醸造及爐の各部門に分けられて其の發達の歴史と現状が餘す所無く説明されて居る。

航空部にはリリエントールのグライダー2臺や1908年製のライトの飛行機、グラデーのリベレ型、プレリオ單葉機、ユンカースの最初の飛行機、フォツカーD7型機、ドルニエワル、ヴァンピール滑翔機、を始め各種の航空發動機を並べ又飛行船

氣球等の陳列もある。

化學の部では石炭液化の過程は一目して判る様に圖表で説明がしてあるし、自動車部には最近迄の自動車の發達が判る様にゴットリーブ・ダイムラー及カール・ベンツの自動車から始まつて各時代の自動車並び、プレキングラスで覆つた自動車や發動機で内部の機構が判る様になつて居る。

光學の部では係員が老若男女を前に光學の原理を實驗に依つて説明して居る。

道路の部では國營自動車道路の寫真と模型で其の特徴を説明して居る。

參觀者が實驗し得る設備は到る所に準備されて居るのである。

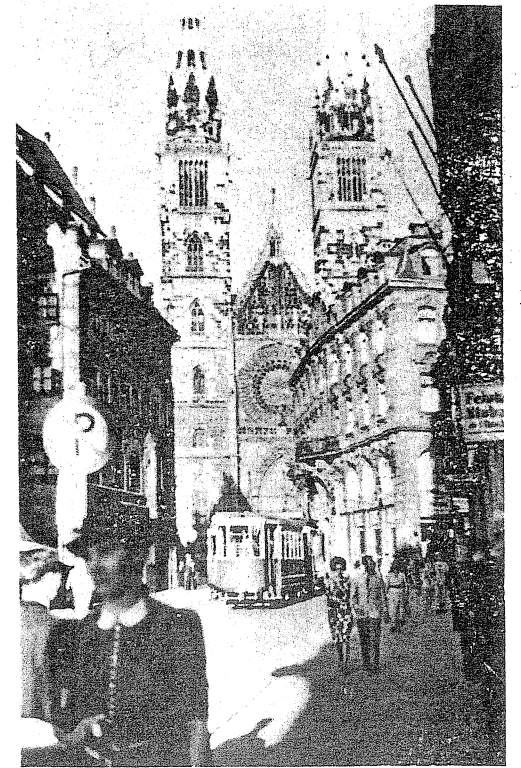
館内をまはつてつくづく獨逸は科學と技術の國である事が判るのである。

守衛に許可を得て寫真を寫して2時間半で急ぎ足の見學を終る。

ホテルに歸つてルーベンに休み1時の汽車で出發すべく計畫を立て、居ると偶然にも親友K君、Y君それに大先輩M氏に邂逅する。何れも自動車で伯林に歸る所である。話は忽ち一決して、一行の自動車に便乗する事となつて1時近くミュンヘンの町を後に國營自動車道路に出る。空には一點の雲も無い快晴である。緑の平原を北へ北へと時速100軒で飛ばす。ガソリンスタンドは何れもガソリン賣切れの札を下げて居る。車の往來も常より少く何となく嵐の前の感じである。

ホップの畠の中を走り森に入り谷に下つて一路ニュルンベルヒを目指す。車内では例に依つて國營自動車道路と、之を建設したトッド博士の話等盡きる所を知らない。運轉するK君の技術と道路がよいので誰も高速を心配するものもない。同朋同志の水入らずの自動車旅行は此の上も無く楽しいものである。

ミュンヘン、ニュルンベルヒ間173軒を僅か2



第9圖 聖ローレンス教會（著者）

時間餘で突破した我々は4時近くにはニュルンベルヒのホテルに着いて居た。

顔見知りのホテルに依頼してガソリンを手に入れた一行は、少憩の後私を残して伯林へ發つて行つた。

ホテルに一人残つた私は夕食を攝るべく町に出てニュルンベルヒの古都の裏町に中世紀の香りの高い細道を歩いて廻り、やがて美しいゴシック風の聖ローレンス教會の横の古びた階段を下つて13世紀から傳はるナツサウアー・ケラーの薄暗いテーブルに席を占めて居た。壁には13世紀からの古い版畫が所狭き迄に並び、欄間には古い皿がぎつしりとつまり、更に其の上の棚には陶器の壺が飾つてある。板の壁は古色蒼然として此の世のものとも思へない。中央に飾られたヒトラーの肖像畫と其の前のテーブルに置かれたハーケンクロイツの小旗とがなければ、此處に入つた人は中世

紀にかへつて鎧を着けた騎士となつた思ひがするであらう。

斯くの如き傳統の豊かな所で始めて獨逸の古い料理を味ふ事が出来るのである。

食事が終るとボーイが署名帳を持つて來て紀念に何か書いて呉れと云ふのである。書く前に一通り頁をめくると懐しい同朋の人々の筆蹟が所々に散見する。英、米、佛、南米、支那、バルカン諸國の人々が思ひ思ひの文字を綴つて居る。

ボーイの持つて來るペンを取つて日本文で感想を綴り、獨逸語を加へて紀念とする。

ケラーを出た私は嘗つて一月前に此處を訪れた時の思出も深い町々を散歩した。黨大會も迫つて其の準備の爲か町にはヒットラー青年團や獨逸處女團(BDM)の指導者の制服をつけた若人や黨員の往來で雑沓して居る。黨大會の都にふさはしい情景である。ニュルンベルヒ名物の版畫の店を訪ね、更に水の都としてのニュルンベルヒを見るべくヘンカーステグ橋の前に立てば、15世紀に作られた古めかしい橋はフラシユライト光を浴

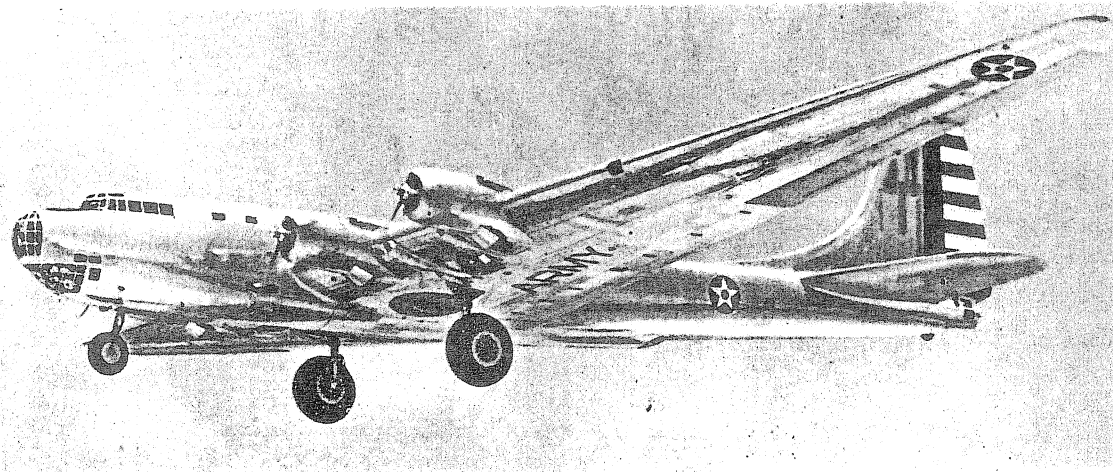
びて涼しく水に影を落して居る。水に張出した古い家屋の窓、水を覆つて垂れて居る楊柳の枝、何れも400年の長い歴史を語る姿である。

新しきものと古きものとの交錯はニュルンベルヒをわいて外には求められない。13世紀からの古い文化が數百年の風雨にたゞかされて燻んだ寒氣の中に其の存在を主張して居るかと思へば、郊外には新獨逸の建築様式を誇るルイトホルド廣場やツエツペリン廣場、更に獨逸のスタヂオン、ナチス黨會議場等の老大な規模のナチス建築が建てられつゝあるのである。

そして翌日私はニュルンベルヒの近代的側面を物語るM・A・Nの工場を訪れたのである。

電磁式疲勞試験機、M・A・N型材料試験機の製作工場と研究室を廻り更にトラックの製作工場、鐵道車輛の製作工場等廣い構内を數時間に亘つて歩き廻つたのであつた。

そして翌日ニュルンベルヒを後に伯林に歸つたのである。車中で買つた新聞にはポーランド問題の切迫を告げる記事と寫眞が載せられて居た。



離陸したダグラス E-19 型超重爆撃機(米國)

風が吹いてゐる時のグライダー又はソアラーの性能に就いて(續)

工學士 近藤政市⁽¹⁾ 校閱
村野美郎⁽²⁾

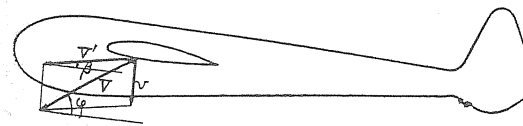
23 對地沈降率

$$w = V \sin \varphi = V' \sin \beta$$

$$= \sqrt{\frac{2}{\rho} \cdot \frac{W}{S} \cdot \frac{C_x}{C_r^3}} \dots (2.7)$$

此値は v の値の如何に關はらない。計算結果を第6圖に示す。(前月號参照)

§3 垂直風のみの場合(第7圖参照)



第7圖 垂直風のみの場合の速度の關係

3.1 對地滑空速度

$$V^2 = V'^2 + v^2 + 2v V' \sin \beta$$

$$\therefore V = \sqrt{\frac{2}{\rho} \cdot \frac{W}{S} \cdot \frac{1}{C_r} + v^2 + 2v \frac{C_x}{C_r}}$$

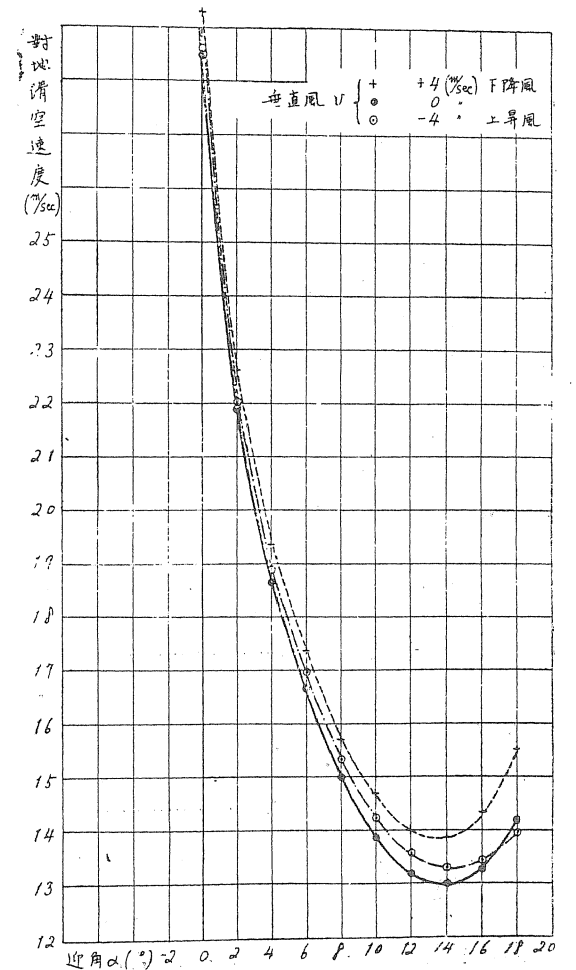
$$\sqrt{\frac{2}{\rho} \cdot \frac{W}{S} \cdot \frac{1}{C_r}} \dots (3.1)$$

$$= \sqrt{\frac{2}{\rho} \cdot \frac{W}{S} \cdot \frac{1}{C_r} + v^2 + 2v \frac{C_x}{C_r}}$$

$$\sqrt{\frac{2}{\rho} \cdot \frac{W}{S} \cdot \frac{1}{C_r}} \dots (3.2)$$

實例計算の結果(第8圖)より明かなる如く、相當大なる垂直風が吹いてゐる場合に於ても、對地滑空速度は殆んど影響を受けない。尙第8圖の縦軸の

(1) 東京工業大學及び横濱高等工業學校
(2) 横濱高等工業學校航空工學科第三學年在學



第8圖 垂直方向の風が對地滑空速度に及ぼす影響

目盛は、第4圖の場合の3倍に取つた。

3.2 對地滑空角

$$\tan \varphi = \frac{V' \sin \beta + v}{V' \cos \beta} = \tan \beta$$